



K939
コ14
(3)

管仲くわんちゆうが老馬らうま雪中せいちゆうと導まひき雲長うんちゆうの赤兔馬せきとま故陣こじんと忘わすれ空馬くうまの
 性しやうたる良りやうよりて且かつ義ぎなり。然しかるも瘋癲ふうてん狂駢きやうべんの時とき人喰馬ひとくひまと
 むとるありとぞ。去まべ一匹いっぺきの馬うま狂きやうひて千匹せんぺきの馬うま共ともに狂きやうふ世よの諺ことわざ
 の群馬ぐんまの嘶あはれ一いったる筵ひらた席せきと。卷まき収とめたる三編さんぺん目め一鞭いっぺん直ちよ
 千里せんりの駿うん筆びつ世よの流りゆう行かうの先駢せんべんの雜ま賀がが例れいの手綱てづな捌さき乗廻りま
 一いったる皇城きやうじゆうの鞞きん下かへ勿論ぶつろん全ぜん國こく一いっ般ぱん。よく此こゝと知しる伯樂はくらくなり
 て良馬りやうまの數かず小實入せうじつにの声價せうげ鳴ならま硯えんと摺墨すりすみの功頭こうとうへと一いっ大
 團圓だんげん乘鎮じやうちんめたる讀切物よみきりもの此駿馬こゝうんまとして鹿しかとする。超ちやう高かうふたを
 保証ほしょうの為ため馬丁ばぢやう代しろりふ轡しを採とつて序じよの拙文せつぶんを添そへると云爾いふのみ
 明治十四年戊己年仲秋 猫々道人頓題



三編
上の巻

金松堂持

蓆篋群馬嘶
雜賀柳香著
梅堂国彦画

正木二等巡査

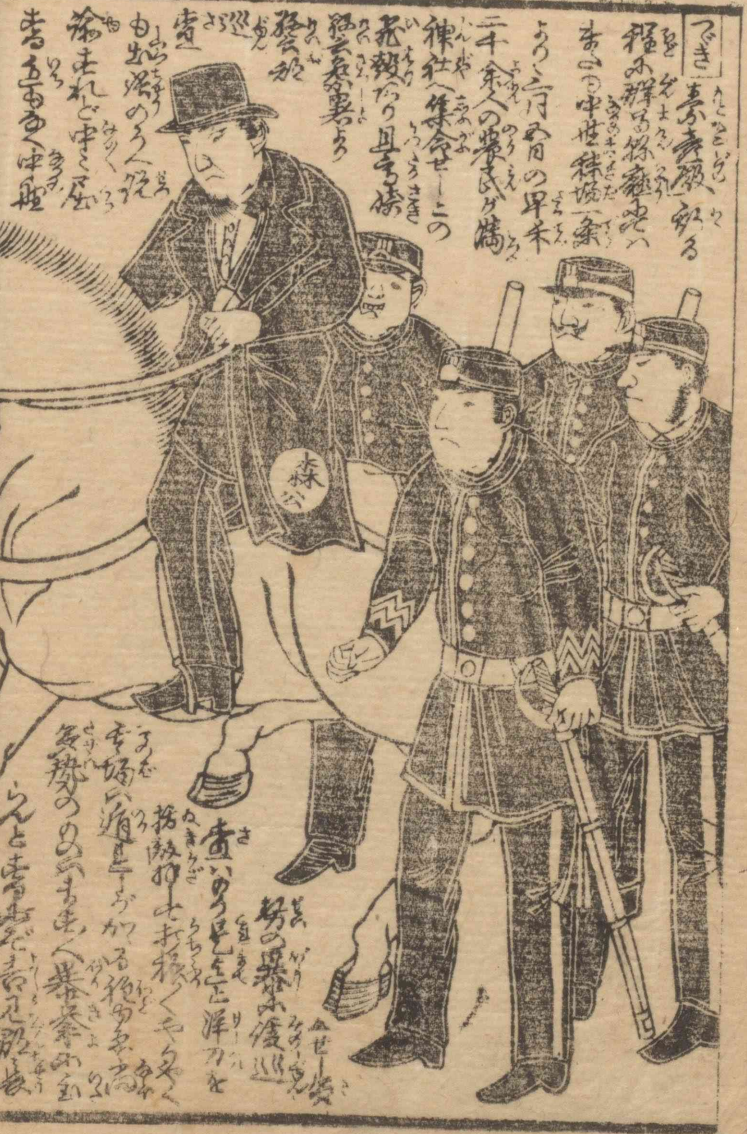


矢島二等巡査



三ツ塚越伊勢松

三ツ太町由造



つぎ 素衣級なる
程小群の森を歩
きの中世練城一
より二月の甲未
二十余の衆が満
練社(集会せよの
花娘なり且ち條
程を要あり
登於
由地源のそん説
浴まれど中心屋
若くは中世

本場の道とかがる物あり
多勢のひとも出る暴徒の至
らんと書かざるに可長
十の暴徒後巡
查りしに洋力
格闘のそん説
を



矢やさるや
原野は入く松の
沢村の極付
榎柏の極付
らる松松元と松
足も長あを松ふひの
咲ぬれゆへに押出をき勢
以別すれゆへに押出を
動舞もさく松ひの松松
巡歴と馬は又の松と打もあ
あご二管巡歴は伝来が松
まじり大唱一書五而性めら神
まじり果た松松松松
か松の松松松と松松松松
松松松松松松松松松松

十月五不此如松松松松松
松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松

松松松松松松松松松松

つぎ おぞ我あらんと泣集より二千

入余よ及びくは是より人殺し之をふ

きて若村の女をいふ教えと

一在り日若村若村の女下

女へ三むち村のチ

長年田舎の宅

一在り日若村の女

若村へ押子を渡すとら敷

家を殺し

果敢を殺し

梅より久

月日若

後若村の



一若村集金の教を尋問されし其時

代答より其茶の教を其母尾指首との

受取のふしをいふて其母のまはしと

おひきよて十五女

若長は若村と推す若村下若村大出祀友

上申考中より一高

若村の

若村の

若村の

若村の

若村の



全別ちと人集より千

波とトッとして挙なれば

くもの影りやつきま

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女

若村を若村の女



銅板開化

近世新聞

日本小説

明治節用集

好むは字引

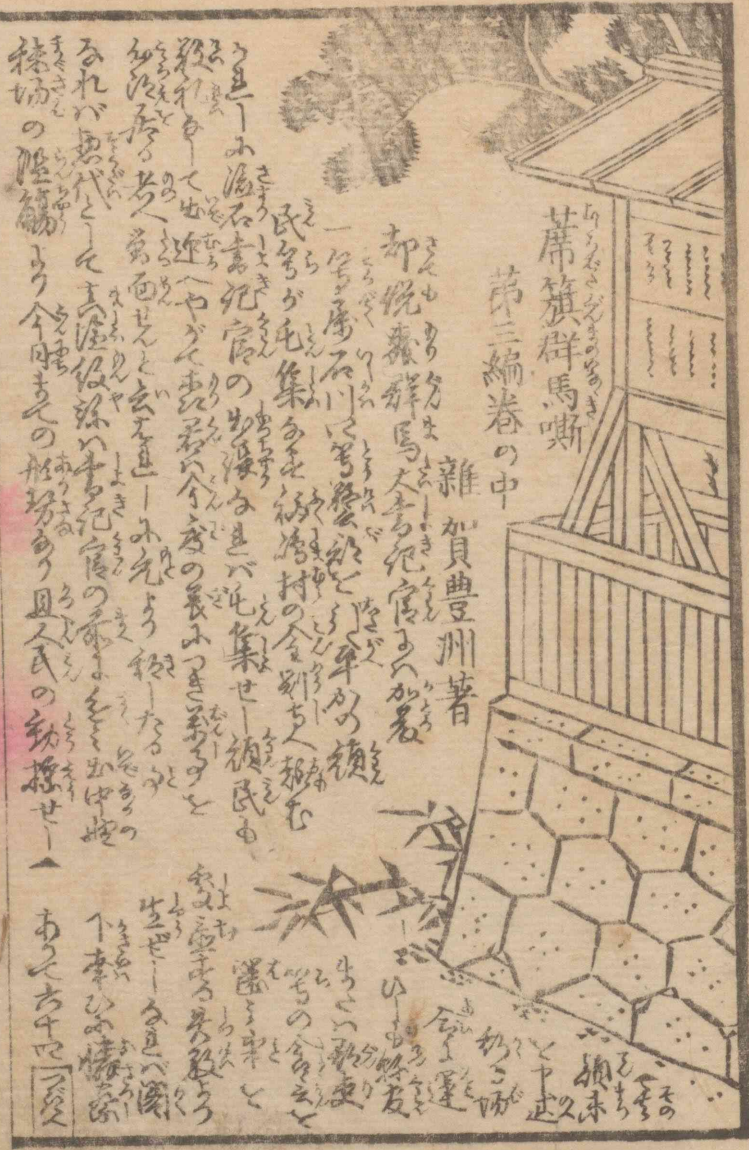
算法大成

雑俗日用文

雑文三件用

文
錦
問
星





第三編卷の中
蒲旗群馬嘶

雜賀豊洲著

却悦齋群馬文書紀官の表

一筆書屋石川は書屋とて平外類

氏名が毛集を縁村の合別支人相む

うはし小海石書紀官の物邊を是ハ此集せ一被民由

殺れ申て出迎へやがて我君の今度の長ふべき事と

ぬれは世代とて去後復然の事紀官の事よをまか申

稜城の陸編より今時迄の相違あり且又民の動搖せし

あはれ古中

下事ひん

せせ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

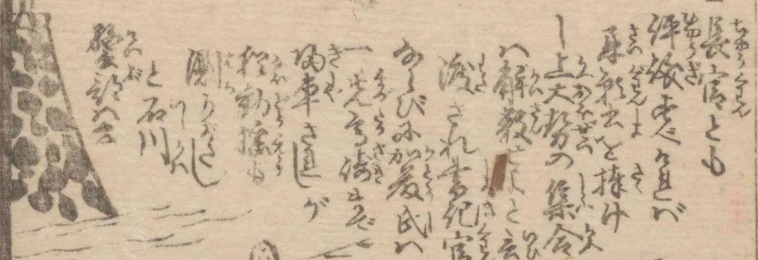


柳香綿
園政函
金松堂梓

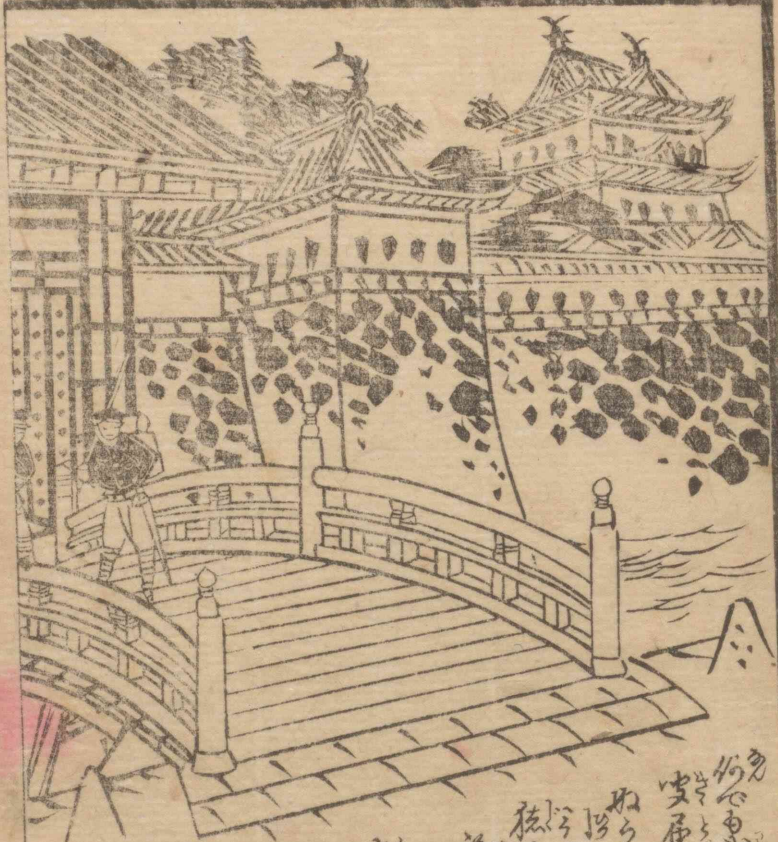
群馬の嘶
之綿
中の春

中之春

〆長官とも
 伴故志をば
 一上大務の集令
 一解教をば
 一海され書死官
 一かよびみか後成
 一先を侍を
 一の車さ道が
 一松動揺も
 一剛りうは
 一と石川
 一と石川
 一と石川



三月一日
 後法寺紀及
 〆長官とも
 伴故志をば
 一上大務の集令
 一解教をば
 一海され書死官
 一かよびみか後成
 一先を侍を
 一の車さ道が
 一松動揺も
 一剛りうは
 一と石川
 一と石川
 一と石川



〆長官とも
 伴故志をば
 一上大務の集令
 一解教をば
 一海され書死官
 一かよびみか後成
 一先を侍を
 一の車さ道が
 一松動揺も
 一剛りうは
 一と石川
 一と石川
 一と石川

つきのこの極きと云橋ある書

紀官の件へ入をきるといふ

はくは星形あり隠微の

處ありなるか一との評決

巡査として其全別入

身存も然の存管よ

ありまき記及あり

原及小暴流傳代より

の船志と前にも其系

の極き船令の存へ説

知さす且内務省へ

申付の久病いと

胃七船令の

U

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

収獲するべ

きよまといひありねるよ

飯を頂牛内倉のそのひの

一あり代所を退きま

若木の窮乏族山内難他

山内難他のおんりふ渡

へあさき業もなれり

人と奮動に控理ごとう

條垣があらうと云願し

公府を記させ根の要

代まをまそりもふを注せ

株切る件で十巴村の

若ど由が金割ちふ七集

一七今も船友の指合



いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

いふ

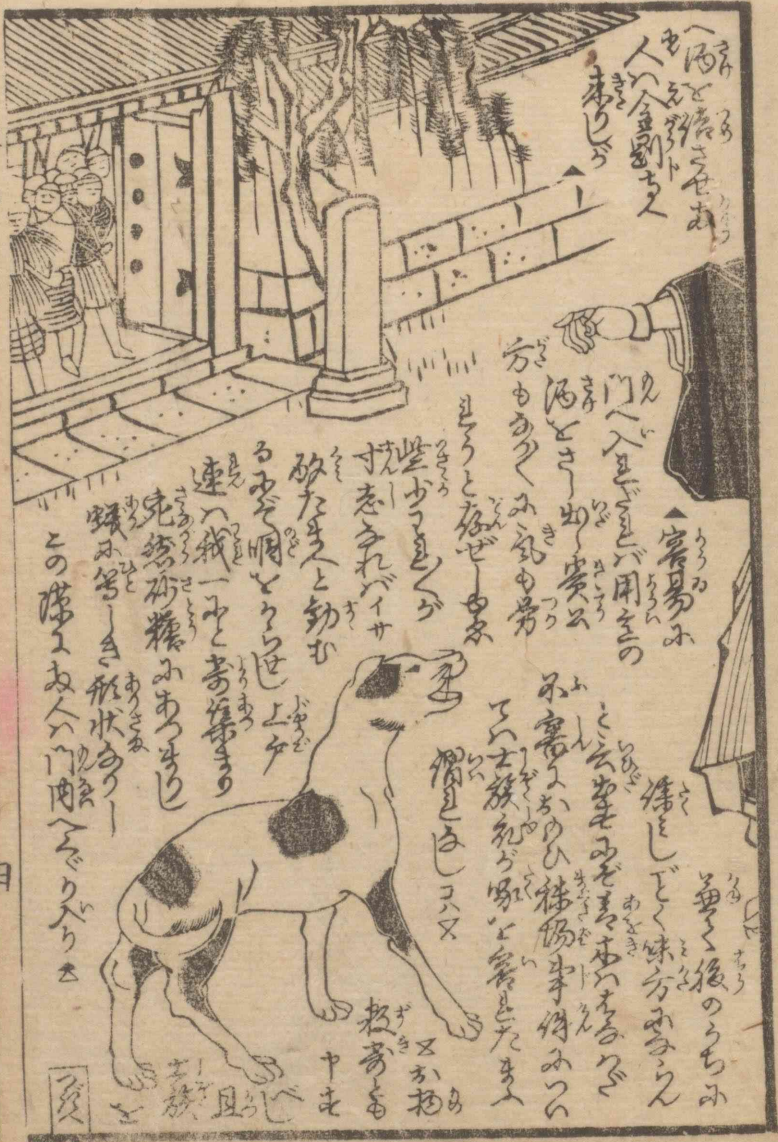
いふ

いふ



一升の靴
 山田が辞め
 由イッハ中く面白
 あはれ、あはれ
 後探用よあるを
 捕縛り終極之さ
 鎮座の徳へとび一櫻の巨科と
 高きさ、あふり身が安楽その上
 公堂より面去るにと云画目めつて

崎
 山
 七の
 友人が
 面去る其
 友士族ハ
 のうちのり
 代
 杉村



一酒と徳さあ
 人の金割さ
 来しが
 門へ入るは用さの
 酒とさゆ実公
 方もちくみぬゆ方
 是うと存ぜし由
 寸志なれバイヤ
 破たまはと効む
 るを明とら世
 連ハ我一やと考集まり
 先考研糖ふあまじ
 張み等一は形状あり
 この障子ぬ人の内へ入り入り

客易ふ
 此の障子ぬ人の内へ入り入り
 後々のうち
 不審ふあひ様陽事付あつ
 下士族知が家と客とたまふ
 此の障子ぬ人の内へ入り入り
 招きも
 中ま

今更の事件と源助

種と小次郎と母と又

又と母



今更の事件と源助
ある身分は人
ふくむは用事
中夜寝易
鬼へ取り
おのゝの
人目を
疾るは
身の入
うと思
根は
宅と

一
後
頃
は
物

山
山
山

新編 浮城物語

身とあつた



新編 浮城物語
業ド
身の上
と思
と路
と路
入る
人
級
知
面
ひ
く

男
妻

山
山
山
山
山

郡山三町

九



つぎあたへ
必直まうり
集合と解散をまゝ其代ハ
そのお人自前あつて
然るの不埒の産ハ上
裁判の裁洋と作ぐが打ッて
村のこゝろあるハ不肖の拙者ガ
一言と用ひあつて此世代とも

▲世帯のつゝの思ひ
まろ多くの罷へた申
よ父ガ配氣おひ入ると
流石の般き致の脚ガ
練めい突ふととらふ
今更後深由際とと
▲替へ
なきて
居たり
○其の條
後
後
後

銅版開化土名

近世紀聞

日本小史

明治節用集

算法大成

雑俗日用文

三休用文

金

金

金

金

榛名山朝朗
箕輪村夕霞

蓆旗群馬嘶

三編 木履

金松堂梓



下





石の夜
新
巡査二百名と引平一と
全別入の出張さ区ハ二月十番
の早天此この日ハ宵方若

命と
残されバ
最甲作
大衆ハ
と再

向ひらう製代巨
野の者ハ
まゝ不備ふく
りその恨ハ疾
く退教
先一命と拒む
と在ハ
悪くあんと喚ま
あさう指揮は
巡査と門
入と
五とッリヤ
縛りふ衆
こと
逃ま



礼を催し一室定有あらね
柄ハ
方と固
最
よて云
どの養
種
大母集
以ての介
且ど
るを
さし
やう
怒

服
あさう退教と
はさぬの
遅ま
朝令
者
伊
向
せ
者
ハ



つぎ打拵
おつと御堂
入らお拵
この寺村の日常
よりか自慢不流のなる
協誠伊勢松とりの入

捕縛さる
ぞと洋刀拵
指伊勢松が
縁を
傷成
あつと
更上匠下匠

森
おのれのかせ
えん海の刀拵り
よつら
まの

あつと
おのれのかせ
えん海の刀拵り
よつら
まの



男の道とあるより
まの二三巡査
巨射松
代り代り
伊勢松がお
敵と仕まらんと
竹槍あつて
向ふをより
腕を
して後悔ままと
竹槍とりの女つて
ありと人バ
まの立向へハ
おのれのかせ
えん海の刀拵り
よつら
まの

虚と空を
うらと
この松
おのれのかせ
えん海の刀拵り
よつら
まの

おのれのかせ
えん海の刀拵り
よつら
まの



つぎ 知るやも各
 巨魁の者之捕縛
 王統を遠慮す
 と明王六月越代
 人相とてつて
 を知るも直様不
 おも女務ありしと
 迷言傷まを
 中々殊様境取
 組合付一と
 ざる事
 院係
 ども云とた京

△以て
 捕縛
 巨魁
 民
 小
 不
 捕縛
 巨魁
 の者
 王統
 遠慮
 明王
 六月
 越代
 人相
 知る
 やも
 各



たに解教
 さるの
 倉等
 官
 外族
 あつ
 ある
 東
 ひ
 元
 と
 重

石川
 あ
 村
 家
 火
 捕
 巨
 の
 者
 王
 統
 遠
 慮
 明
 王
 六
 月
 越
 代
 人
 相
 知
 る
 や
 も
 各

羊馬三ノ



と掛つてのくも
威をさしてが
老も南角か
の白状なれ
をと鏡と

るぬおと妹はた右より
るを糸糸と眼形心制一髪奏署一とむとや

父が罪とせよ
小代へん
重なる

と彼の助
と彼の助
と彼の助
と彼の助
と彼の助
と彼の助
と彼の助
と彼の助
と彼の助
と彼の助



と権を人殺と
集あま海の意且
那み罪へる小捕徳々
性へいひまをむねに
巡一を巡査とてた殺せ

意彼の助が正名者ふしてける
彼の助はも痛へ父殺縁が此
おの業カとれとと我衣と貴
殺んとせむは遠ひちりませ
あふんされとち吉村の衆は

の二
又
又
又
又
又
又
又
又
又
又

羊

右

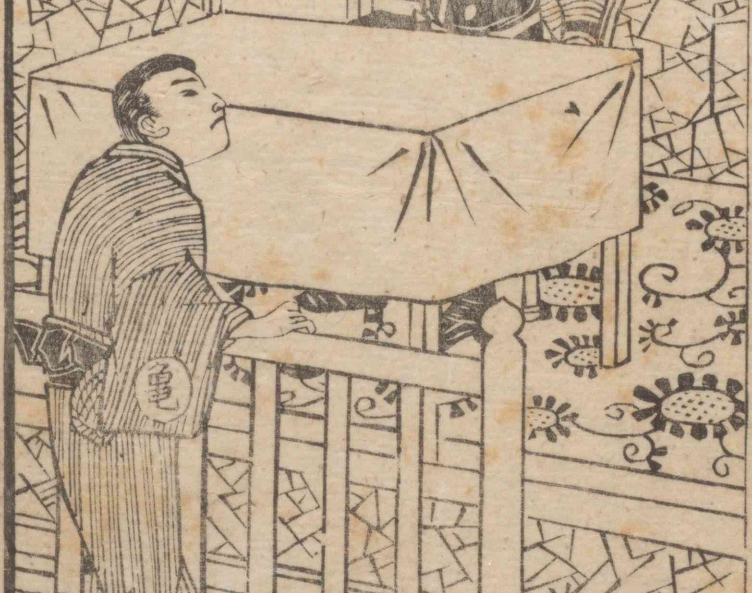
二

洋馬三下
津浦舟着
捕せり
水の危とあり
又わよあつて
股後とカ
且バ
ある名
理と
収納
及と



月共
肉替
白首
さる
切
切
切
切
切

洋馬三下
死の
伴
死
死
死
死
死
死



東
東
東
東
東
東
東
東

春の海

彩霞園柳香著 梅堂國政画

〔き〕 志願を親身二言へ履送とあり日有老二義の個人の上
 群黨然へちるふるうさの推日月正句のふあ七暴勤の顔
 本同今か個人中をさる不月為者不をさると
 かの株樹ふあつまつてゆきとめぬ群との
 強き由法定せしは若代の友さぬ代
 の右平銘支勇め路の津と
 この小豊湖が杜あたまのな
 徳とさなてさふさふと
 〔系〕 縣不升此村の西田桂他が



御明治西年 芝原町三丁目蓮寄留
 早稲及横山町三丁目香地
 編輯 雜質豊英朗 出版 辻岡文助
 金く死人の死るうとは
 一婦技あり不戯れ事
 〇看
 家ち不
 筆知

通世其用
 日不計
 明治諸用
 算法
 雑俗日用
 三休用

金



群馬県立図書館



0296320-5

K939
214
(3)

163608 群馬県立
図書館